

民芸建築家・宮地米三の作品について

石川 祐一

1. はじめに

民芸運動のメンバーやその同人らによって少なからず建築作品が残されたことが知られている¹⁾。彼らの建築作品は殊に第二世代と呼ぶことのできる作家らによって、戦後においても造られていく。しかし、そうした作品群とは別に「民芸風」と呼ばれる建築意匠が流行したことは一般にも知られている。

「民芸風」の建築の流布に役割を果たした建築家として、宮地米三の名をあげることができる。「民芸風」の商業建築を多く手掛け、俗に「民芸建築家」と呼ばれることも多い。宮地の作品は多数にのぼると考えられ、その全貌を知るには今後の調査が必要である。本稿では現時点で概要を確認することのできた宮地の作品（表参照）を報告し、その特徴や意義について考察したい。

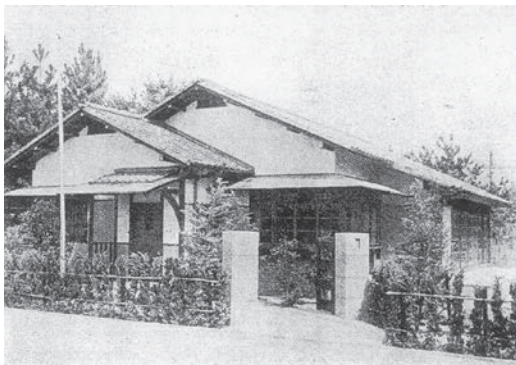


写真1 夏の家

2. 「民芸風」建築への契機

宮地米三は、昭和6年（1931）に神戸高等工業学校建築科（現神戸大学）を卒業後、竹中工務店に入社し、後に設計部長をつとめた。昭和22年（1947）に宮地建築設計事務所を開設している²⁾。宮地の民芸風建築以前の仕事は不詳だが、昭和9年（1934）の日本建築協会による懸賞募集「夏の家」に設計案（写真1）が入選したことが確認される³⁾。同案による住宅は全体として和風の外観を有しているが、特に民家風の意匠は採用していない。

○河井寛次郎との共作

宮地が民芸と出会った契機と考えられるのが、陶芸家・河井寛次郎との共作の機会である。

昭和13年（1938）当時、竹中工務店神戸支店設計部に在籍していた宮地は、鉄道高架下商店街「阪急三宮楽天地」の設計を



写真2 竹葉亭

(表) 宮地米三 作品一覧

建築年代	名称	構造	所在地	用途	施工	備考	現存可否	典拠
昭和14年(1939)	竹葉亭	(高架下)2階	神戸市	飲食店	竹中工務店	河井寛次郎指導	×	A
昭和24年(1949)	一平	木造2階建	大阪市	飲食店				B
昭和25年(1950)	キングス・アームズ・ホテル	木造・煉瓦造	神戸市	飲食店			×	C(1981年12月)
	ビフテキ・本町スエヒロ	(木造2階建)	大阪市	飲食店				D(1958年11月)
昭和26年(1951)	スエヒロ本店	木造	大阪市(湖南市)	飲食店	林組		○移築	B, F
昭和30年(1955)頃	はなや(スタンド席)	木造	大阪市	飲食店		(改修)		D(1959年2月)
昭和32年(1957)	風流お茶漬け・恵方	木造2階建	大阪市	飲食店	岡田信造	(改修)	×	B, G(1957年7月)*
昭和32年(1957)設計	上島邸	(木造)	大阪府豊中市	住宅				D(1958年7月), H
昭和32年(1957)掲載	おでん・格子茶屋	木造2階建	大阪市	飲食店	鷹工務店	(改修)		E, D(1957年7月)
	皆美別館	(木造)	松江市	旅館	直営	(改修)		B, D(1957年8月)
	串料理・藤助	木造2階建	大阪市	飲食店	山本工務店	(改修)		B, D(1957年9月)
昭和33年(1958)	ひさご家	RC造 階建	米子市	旅館				D(1958年9月), H開取り
	民芸そば・しのぶ庵(本店)	木造2階建	大阪市	飲食店	山本工務店			B, D(1957年12月)*
昭和33年(1958)掲載	有馬山荘	木造2階建	神戸市	保養施設	大木工務店			B, D(1958年1月)
	酒亭・たまり	(高架下)	大阪市	飲食店	鷹工務店			D(1958年3月)
	小料理・ひとくち	木造2階建	大阪市	飲食店	中井工務店	(増改築)		B, D(1958年6月)
	鳥市	木造2階建	京都市	飲食店		(増改築)	○	D(1958年10月)
	串カツ・串の坊		大阪市	飲食店		(改修)		D(1958年12月)
昭和34年(1959)	民芸そば し乃ぶ庵(北店)	(ビル内)地階	大阪市	飲食店	大林組	内装設計		E, H
昭和34年(1959)頃	三宅邸茶室	木造平屋建	大阪府堺市	住宅茶室				D(1959年8月)
昭和34年(1959)掲載	鰻・共栄		大阪市	飲食店				D(1959年1月)
	香門(支店)	(木造)	大阪市	飲食店	山本工務店	(改修)		D(1959年4月), G(1960年5月)
	照長		大阪市	飲食店		(改修?)		D(1959年5月)
	皆川邸	木造2階建	京都市	飲食店				D(1959年7月)
昭和36年(1961)	民芸割烹・八雲	木造2階建	名古屋市	飲食店			○	I
	八瀬・ふるさと	RC造・木造	京都市	旅館			○	開取り
昭和38年(1963)	銀座八芳園	RC造6階建	東京都中央区	飲食店	不動建設	内装設計(開建築設計事務所)		E, G(1964年5月)
	ひろしま八雲	ビル内(1・2階)	広島市	飲食店			○	J
昭和39年(1964)	鞍馬寺歓喜院	RC造4階建	京都市	寺院施設(宿坊)	林組	河井寛次郎指導	○	K
	民芸酒房・乃おみな	RC造	大阪市	飲食店	三谷工務店			G(1964年10月)
昭和42年(1967)	割烹くるみ	木造2階建	岡山市	飲食店	松本組			E
	美濃吉本店(玄関棟)	木造	京都市	飲食店			×	L
昭和43年(1968)	雍州路	木造2階建	京都市	飲食店			○	開取り
昭和49年(1974)	スエヒロ高槻店	RC造	大阪府高槻市	飲食店	(西武百貨店装飾部)	内装設計		G(1975年1月)
昭和54年(1979)	竹葉亭	高架下(鉄骨造)	神戸市	飲食店	春島組	内装設計	×	C(1980年12月)
昭和61年(1986)	美濃吉御堂筋店	RC造(地階)	大阪市	飲食店	竹田工務店	内装設計	○	G(1986年12月)

- A) 『月刊民芸』(日本民芸協会, 第1巻第5号: 1939年8月)
 B) 『民芸建築図集』(四季社, 1958年)
 C) 『兵庫民芸』(兵庫民芸協会)
 D) 『日本の工芸』(日本民芸協団)
 E) 『商店建築デザイン選書5 個性ある和風料理店 小料理・割烹・料亭・酒房・和食』(商店建築社, 1972年)
 F) 『近代建築』(近代建築社, 1958年1月)
 G) 『商店建築』(商業建築社)
 H) 『民藝』65(日本民芸協会, 1958年5月)
 I) 『月刊食堂』(柴田書店, 1963年3月)
 J) 『商業建築企画設計資料集成』(商店建築社, 1966年)
 K) 『くらま』387(1964年)
 L) 『京都民芸だより』(1979年9月) / 佐竹力総『三百年企業 美濃吉と京都商法の教え』(商業介, 2011年)
 *一般社団法人 日本商環境デザイン協会HPデザイン年表(製作監修/奥平与人) 参照

担当していた。その店舗の一つ鰻料理店「竹葉亭」を建築する際、河井が民芸愛好家であった施主に民芸の意匠による内装を奨めた結果、河井の内装意匠の指導を得て宮地が設計を行い、店舗は昭和14年(1939)に開店した(写真2)。宮地は後にこの際のことを、「河井寛次郎先生が竹葉の人に民芸風で建てるようすすめられ、私が設計をまかされ、設計をしたのが、私が民芸風建築ととりくんだ始めだった。」⁴⁾と記し、河井との協働の作業が民芸風の建築に向かう契機となったことを述べている。

また、同設計に際しては、土間空間にどのように床の間を設けるかなど、イス座を採用した近代的な平面形式に民家建築を調和させることに苦労したことを述べる⁵⁾。これは主に商業建築を手がけた宮地にとって、一貫して重要な課題となった。後述するようにテーブル上に設けられた特徴的な囲炉裏形式も、この課題に対する解決策の一つであった。

その後も「ひさご家」(昭和33年)、「鞍馬寺歓喜院」(昭和34年)において河井との共働作業の機会を有し、河井から意匠的

な指導を受けている⁶⁾。いずれも鉄筋コンクリートの構造体に木部を貼り付けることによって「民芸風」意匠を表現した作品である。竹葉亭から始まる、鉄筋コンクリート造構造体に木部を嵌め込むことによる表現手法が、以降の宮地の「民芸風」建築の意匠表現に少なからず影響を与えたと推測される。構造体と乖離した表層的な表現手法の模索においても、河井との交流は重要であったと考えられる。

3. 宮地作品の建築的特徴

(1) 外観意匠

昭和25年(1950)の「キングス・アームズ・ホテル」(写真3)は、英国人の支配人からの依頼により英国パブを設計したもので、ハーフティンバー風意匠を施した洋風の外観となっている⁷⁾。同作品は宮地作品の中では例外的な存在と言えるが、調度品には鳥取民藝協会によるイスやテーブルなどを用いていることが記され、民芸との調和を意図した洋風意匠と言える。同作品以降、洋風意匠を試みる機会を有しなかったものと思われる。

大阪「スエヒロ本店」(昭和26年)(写真4)では正面に大きな妻面を見せ、2階窓の



写真3 キングス・アームズ・ホテル



写真4 スエヒロ本店

上部にはむしこ窓や水切庇を用いる外観で、宮地は「京都亀岡附近の民家にヒントを得」たと述べ⁸⁾、亀岡周辺に見られる大壁の妻入り町家の外観をモチーフとしていることが分かる。「割烹くるみ」(昭和42年)(写真5)、「雍州路」(昭和43年)では、妻面の強調はやや薄れるものの、真壁造で妻入の外観としている。

妻入の外観意匠は構造体を鉄筋コンクリート造とする「ひさご家」(昭和33年)(写真6)、「八瀬・ふるさと(中央棟=鉄筋コンクリート造)」(昭和36年)(写真7)、「鞍馬寺歓喜院」(昭和39年)(写真8)においても同様にみられる。外壁に木部材を貼り付ける等により、真壁造風の民家の意匠を表現している。こうした鉄筋コンクリート造による作品では、合掌造や本棟造のような大規模で豪壮な民家風意匠の表現に成功していると言える。このように妻面

を強調する意匠が、宮地の外観表現の重要な位置を占めていたと言える。

一方、平入の外観を採用するものとして、「一平」(昭和24年)(写真9)では、真壁造として、2階に出格子窓を嵌めている。宮地はこの外観について、「飛騨の高山の民家にヒントを得」たことを述べ、大工も高山から呼んで施工したという⁹⁾。既存建物を改修した「^{えほう}恵方」(写真10)(昭和32年)なども真壁造の平入町家をモチーフとしている。

「八雲(名古屋)」(昭和36年)(写真11)では、間口の大きな平入町家の外観を見せる。1階には出格子を備え、2階は窓の周辺を漆喰で塗り込めている。1階部分については「飛騨高山、岐阜名古屋地方」の意匠を取り入れ、2階は防火戸を入れるための戸袋を設けたとしている¹⁰⁾。地域性への一定の配慮も認められる。



写真5 割烹くるみ



写真7 八瀬・ふるさと



写真6 ひさご家



写真8 鞍馬寺歓喜院

その他、宮地の中では数少ない住宅作品として、上島邸（昭和32年設計）（写真12）では大和棟風の外観を採用したことが確認される。

(2) 内部空間



写真9 一平



写真10 恵方



写真11 八雲

○イス座とユカ座（畳敷）の併用

宮地の商業建築作品では、イス座とユカ座（畳敷）の空間を併用する事例が主である。大阪「スエヒロ本店」（写真13, 14）、「八雲（名古屋）」（写真15, 16）、「雍州路」など一定以上の規模を有する物件では、1階をイス座、2階を畳敷の客室としている。宮地が手掛けることが多かった飲食店舗の場合、イス座とユカ座を併用することによって、少人数での飲食や多人数での宴会



写真12 上島邸



写真13 スエヒロ本店1階



写真14 スエヒロ本店2階

など、顧客層の違いに対応できる利点があったと考えられる。

また、イス座室では根太天井や囲炉裏などの採用により土間や土間境の板間のような空間を演出することができる一方、畳敷室では床廻りを備える座敷空間とすることが可能であり、民家風意匠の表現にバラエティーを持たせることが可能となった。なお、「恵方」など規模の小さな空間ではイス座とユカ座を同一階に収め（写真17）、よ

り直接的に民家的空間を演出する事例も見られる。

○吹抜と階段廻りの空間表現

「スエヒロ本店」では、1階イス座室の中央寄り半分を吹き抜けとし（写真18）、2階ではその三方を廊下で囲む構成をとっている。「皆美別館」においても1階談話室の中央部分に吹抜を設けている（写真19）。これらは上部の太い梁が伝統的な民家の吹抜をイメージさせつつも、空間的には近代的な構成をとっている。

また、一定以上の規模を有する作品で



写真15 八雲1階



写真16 八雲2階



写真17 恵方

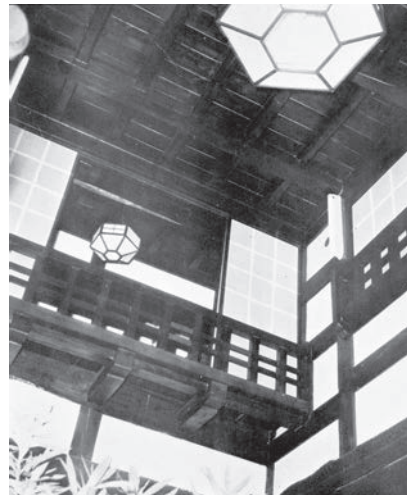


写真18 スエヒロ本店吹抜



写真19 皆美別館吹抜

は、玄関ホールのような空間を配して、階段を設ける事例がしばしば見られる（写真20, 21）。事例の多くは矩折りに90度曲がる階段を設け、2層分吹抜の空間を配する。親柱や手摺には和風の意匠を用いるが、伝統的な民家に見られるような直線で急勾配の階段とは異なり、洋風建築の影響を経た近代の建築思潮に基づく階段である。宮地作品における吹抜空間や階段廻りは、民家風のアイテムを用いつつ、近代の空間構成を意図する特徴的な部分であると言える。



写真20 八雲（名古屋）階段



写真21 八瀬・ふるさと

(3) 造作の意匠

○太い木部材と古色仕上げ

いずれの作品においても、室内の意匠には木割の太い柱と梁を用いて、真壁造の意匠を採用する作品が多い。鉄筋コンクリート造の建物では殊に、板材を用いて太い柱や梁を表現する事例も見られる。現存する建物や写真から確認される範囲では、木部には黒色の古色を施すことが通常で、漆喰仕上げとした壁面との対比を強調していると考えられる。施工に関する記載により、古色仕上げに関しては、「弁柄塗」や「オイル・ステイン塗」を用いている事例が確認できる¹¹⁾。

河井寛次郎と協働した作品において前述したような、鉄筋コンクリート造の構造体に木部材を貼り付けることで真壁造の民家の意匠を表現する手法は、宮地の作品に一貫して見られる。鉄道高架下やビルディングの内部に店舗を設ける作品も多いことから、宮地にとって不可欠な手法であったと言える。

○床の間（押板）と棚

「竹葉亭」を担当した経験を振り返って宮地が述べているように、イス座の空間に民家の意匠を調和させるには工夫が必要であった。「竹葉亭」では、地袋を備えた棚状の空間や、その上部に複数枚の棚板を嵌めて民芸品を陳列する空間が確認される（写真22）。「スエヒロ本店」（写真13）では、イス席に座った際の視線に配慮した棚状の空間に、軸物を掛けていることが確認できる。こうした棚状の造作は、「恵方」（昭和32年）、「八雲（名古屋）」、「八瀬ふるさと」

(いずれも昭和36年),「スエヒロ高槻店」(昭和49年),「美濃吉御堂筋店」(昭和61年)などに一貫して採用されている。

一方,ユカ座室では,「スエヒロ本店」以降,床の間や押板を採用している。また,同建物ではやや数寄屋風の框を用いない蹴込床が確認できる。

○囲炉裏

宮地作品において,民家の意匠を表現する手法として効果的に用いられた装置が,囲炉裏である。ユカ座の室を設けて囲炉裏を設ける事例としては,「恵方」(昭和32年),「ひとくち」(昭和33年掲載)(写真23)などが見られる。

しかしながら,宮地の商業建築作品にはイス座の空間の占める割合が大きい。こう

した際には「八雲(名古屋)」(昭和36年)(写真24),「銀座八芳園」(昭和38年)のようにイス座の床面に自然石を用いて炉を設ける事例が見られる。この形式では実際に囲炉裏の火にあたることを目的とせず,店内の演出を意図としている。

一方,宮地が用いた囲炉裏廻りの特徴的な手法が,テーブル席と囲炉裏との一体化である。「竹葉亭」(昭和14年)ではカウンター席のテーブル上に囲炉裏を設けている(写真22)。通常は板を置き,冬季には板を外して囲炉裏として用いることができる形式である。「恵方」(昭和32年)では,畳室の囲炉裏の他,炉の周囲がイス席となるテーブル状の囲炉裏が採用されている(写真25)。同様の形式は「鞍馬寺歓喜院」(昭和39年),「雍州路」(昭和43年)(写真



写真22 竹葉亭棚・囲炉裏



写真23 ひとくち囲炉裏



写真24 八雲囲炉裏



写真25 恵方囲炉裏

26) など、繰り返し採用されている。

また、「皆美別館」(昭和32年掲載)(写真27)、「皆川邸」(昭和34年掲載)、「八瀬・ふるさと」(昭和36年)(写真28)、では、囲炉裏の片側をイス席、もう片側を床高を上げて畳敷としている。こうした囲炉裏を介してイス座とユカ座を接続する形式は、河井寛次郎の建築作品に見られるもので、河井からの影響を推測させる。

囲炉裏は商業空間の演出に用いる際に有効な装置であったと考えられるが、テーブルと一体化することによるイス座空間との融合の試みは、宮地作品の特徴的な点である。このテーブル状の囲炉裏は、戦後の「民芸風」の飲食店にしばしば見ることのできる形式であり、宮地がその考案者である可能性も高いものと考えられる。

4. 建築作品における 民芸の捉え方

宮地は、「民家は民芸品と同じく、無名の職人と、農民との協同作業によって建てられたもの」であり、庶民の日常生活に根ざすことによって、「無駄がなく機能に即した構造美」をつくり出すと述べ、民家の美しさを評価している。具体的な美的要素として、「梁や柱の部材の雄大などっしりした素朴な構造美、煤で黒光りした色の組み合わせ、何げなく取り付けられた窓、格子、棚、衝立等」¹²⁾をあげる。

しかしながら、伝統的な民家形式を採用すると「平面計画、採光等、近代的観点」から問題を生ずると述べている。その解決策として「現代に建てられるべき民家建築は、民家の持つ良さを現代風に単純化」す



写真26 雍州路1階囲炉裏



写真27 皆美別館囲炉裏



写真28 八瀬・ふるさと2階囲炉裏

ることが必要で、高価である大きな木材をいたずらに用いず、「小屋梁、天井梁の組み方も単純化し、木格子の現代化、線型、彫り物模様の単純化したものを用いて設計」すべきであるとする。また、「幾分近代的な数寄屋風意匠を取り入れて、少しくだけた民家建築もあってよい」とも述べる¹³⁾。

宮地の商業建築作品の多くは、黒く古色仕上げを施した太い柱や梁による民家風意匠を表現している。その際に太い材を用いるのではなく、付け柱のような表層的な表現が行われていることが多い。商業建築を数寄屋で建築すれば建設費が高く、すぐに時代遅れになるが、民家風にして古色を施せば木材も安く済み、古くなるほど渋みが出るため、施主には民家風で建てることをすすめているとも述べている¹⁴⁾。

以上のように、宮地は民家の持つ民芸的な美しさを評価し、現代においても民家建築を建てるべきであると考えた。しかしながら、伝統的な民家をそのまま採用すると近代的な用途に合わない部分があるため、民家の美として評価される意匠を現代的に単純化し採用することを提案し、実践したと言えよう。

宮地の手掛けた作品は商業建築が主流であったが、住宅作品などには「幾分近代的な数寄屋風意匠を取り入れて少しくだけた民家建築」が試みられた可能性もあり、今後の事例発掘を待ちたい。

5. おわりに：

宮地作品の特徴と意義

宮地米三は、その言説から確認されるように、新たな民家建築の創出を目指していた。この点は柳宗悦をはじめとする民芸運動の第一世代のメンバーの目標を踏襲するものであると言える。民芸運動の建築作品の中で、宮地が果たした役割の一つは、都市型の民芸建築を生み出したことである。民芸運動の主要メンバーやその同人らの残した建築作品の多くは、自身やパトロンらの住宅、民芸品の展示施設などに限られており、言わば閉じられた社会にとどまっていたとも言えよう。宮地の作品は、民芸の建築を都市空間に押し出した。さらに誰でも利用することが可能な商業建築に広げることで、大衆が触れることのできるものとするに寄与したと言える。

宮地は民家の美しさを構成する要素を単純化して採用する手法を提案したが、実作の場が主に商業建築であったため、より民家風意匠の強調が求められることが多かったことも推測される。現代民家と呼ぶことの可能な木造作品が見られる一方、鉄筋コンクリート造に表層的に民家風意匠を貼り付けることに抵抗がなかった点が、宮地の作風の特徴である。こうした商業化された建築群は一般においても「民芸風」として流布し、宮地がその流行に最も大きな寄与をした建築家の一人であることは否定しがたい事実であろう。矛盾を有しながらも、「民芸風」という一つの潮流をつくり、現在においてもそれが支持され続けていることは特筆すべきことである。

戦後日本の建築史においては、モダニズムの隆盛と衰退、その克服へと向かうポストモダニズムなどの流れが語られることが通常である。しかしながら、「民芸風」建築の有した社会的な影響力や生命力は建築史においても無視することはできず、一定の位置づけが検討されるべきものと考えられる。過去の商業建築が急速に失われていく中で、宮地米三の作品の掘り起こしが進み、再評価が進むことを期待したい。

付記

貴重な資料をご提供頂いた辻野純徳氏をはじめ、現地調査や図版掲載にご協力頂いた方々に御礼申し上げます。また、今後も調査を継続するにあたり、著者の知見の及んでいない建築作品や資料につきまして、情報をご提供頂けましたら幸いです。

いしかわ ゆういち
石川 祐一（文化財保護課 主任（建造物担当））

註

- 1) 藤田治彦, 川島智生, 石川祐一, 濱田琢司, 猪谷聡『民芸運動と建築』(淡交社, 2010年)等を参照。
- 2) 宮地米三, 伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社, 1958年) 著者略歴。『月刊食堂』(柴田書店, 1963年3月) p.19。
- 3) 『月刊住宅』(住宅改良会) 1934年10月号 p223。
- 4) 前掲2) 巻頭「民芸風建築について」。『兵庫民芸』(兵庫民芸協会, 1980年12月) pp.2-3 では、河井寛次郎の設計によるものとする雑誌記事を否定し、河井の指導を得て自ら設計したことを強調している。
- 5) 前掲2) 巻頭「民芸風建築について」。
- 6) 『くらま』387 (1964年) P.8。石川祐一「河井寛次郎の建築意匠：民芸運動による建築的成果」『デザイン理論』(2005年5月) pp.13-16。
- 7) 『兵庫民芸』(兵庫民芸協会, 1981年12月) p.10。
- 8) 『近代建築』(近代建築社, 1958年1月) pp.26-27。
- 9) 前掲2) 巻頭「民芸風建築について」。
- 10) 『月刊食堂』(柴田書店, 1963年3月号) p.7。
- 11) 宮地「現代民家建築」『民藝』65 (1958年5月) p.14では、木材の節目を隠すためにも、弁柄塗やオイルステイン塗とすることを奨めている。また、「民芸酒房・香門」『商店建築』1960年5月号(商店建築社), 「八雲(名古屋)」『月刊食堂』1963年3月号(柴田書店)など、古色仕上げにオイルステインを用いたことが確認できる事例報告も多い。
- 12) 前掲11)「現代民家建築」『民藝』65, p.13。
- 13) 前掲11) p.13。
- 14) 前掲11) p.13。

[図版出典]

- 写真1) 『月刊住宅』1934年10月号(住宅改良会) p.223。
- 写真2) 『月刊民芸』(第1巻第5号:1939年8月) p.37。
- 写真3) 『兵庫民芸』1981年12月(兵庫民芸協会) p.11。
- 写真4) 『近代建築』1958年1月(近代建築社) p.27。
- 写真5) 『商店建築デザイン選書5 個性ある和風料理店 小料理・割烹・料亭・酒房・和食』(商店建築社,1972年) p.83。
- 写真6) 著者撮影
- 写真7) 著者撮影
- 写真8) 著者撮影
- 写真9) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年)巻頭「民芸風建築について」
- 写真10) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年) p.18。
- 写真11) 著者撮影
- 写真12) 『日本の工芸』1958年7月(日本民芸協団)
- 写真13) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年) p.12。
- 写真14) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年) p.15。
- 写真15) 著者撮影
- 写真16) 著者撮影
- 写真17) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年) p.21。
- 写真18) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年) p.17。
- 写真19) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年) p.45。
- 写真20) 著者撮影
- 写真21) 著者撮影
- 写真22) 『月刊民芸』(第1巻第5号:1939年8月) p.38。
- 写真23) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年) p.73。
- 写真24) 著者撮影
- 写真25) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年) p.22。
- 写真26) 著者撮影
- 写真27) 宮地米三,伊東安兵衛『民芸建築図集』(四季社,1958年) p.46。
- 写真28) 著者撮影